

## NICU 入院中児の母親の対児感情と言動の文献レビュー

### —新生児コット移床前後の時期に着目して—

釘崎瑛梨<sup>1)</sup>, 山本直子<sup>2)</sup>

#### 要旨

NICU 入院中の児の母親の対児感情と言動を明らかにすること、新生児コット移床前後の時期の母親の対児感情と言動の特徴を明らかにすることを目的に文献レビューを行った。

分析対象となった17文献を分析した結果、NICU 入院中の児の母親は、〈怖い〉〈自責の念〉などの否定的感情と〈可愛い〉〈愛を感じる〉などの肯定的感情を持っていた。

母親の対児感情と言動を分析した結果、「母親役割」、「出産体験」、「児への対児感情と関わり」、「母子分離」、「NICU の環境や医療処置」の5項目に分類出来た。新生児コット移床後の方が、母親の否定的感情や言動が減少していた。

看護師は新生児コット移床前後の母親の対児感情と言動の特徴を理解し、信頼関係を構築すること、不安の傾聴や感情表出の機会を作ること、個別な支援を行う重要であることが示唆された。

キーワード：対児感情、NICU、母親、新生児コット

#### I. 緒言

わが国の人口動態統計によると、2017年の出生数は約94万人で<sup>1)</sup>、そのうち早産率は5.6%と低率であるが低下することなく横ばいで経過している<sup>2)</sup>。新生児死亡数は831人、乳児死亡数は1761人と年々減少し<sup>3)</sup>諸外国と比較しても低率である<sup>4)</sup>。これらは、医療の発展に伴い、早産児や低出生体重児の救命率が上昇していると言える一方で、NICU での入院管理を必要とする新生児が増加していることが考えられる。

先行研究ではNICU 入院中の児の母親の対児感情、育児困難感やストレス、それに関連する要因について検討されていた。その中で、母親は出産した実感の無さや、不安、自責の念を感じているが、児に触れること、児の状態が安定することで安心するという感情や嬉しいという感情を持っていた<sup>5,6)</sup>。また、出産による母親自身の身体回復が不十分な状態で、早産の罪責感や児に対する哀

れみ、接触の恐怖感を強く抱き、児の状態や成長発達、後遺症への不安を募らせていた<sup>7)</sup>。加えて、NICU に入院し、保育器収容となることで、母親と子どもの物理的な分離が、母親と子どもの間に心理的な距離を生じさせていた。さらに自由に抱けないことが母親となった実感を持ちにくくしていた<sup>6)</sup>。早産児や低出生体重児など、児に健康上の何らかの問題がある時、NICU での母子分離を余儀なくされ、そのことは母子関係や愛着形成、母親の児への対児感情、育児に影響を与えるのではないかと考えた。

先述のように、母親の対児感情について研究された文献は散見されたが、母親の感情を経時的変化で表し、整理されている文献は少なかった。NICU において、保育器から新生児用コットへ移床となることは、児は急性期を脱した状態であり、かつ母親がより育児に参加しやすい時期であると考えられる。このため新生児用コット移

<sup>1)</sup> 元鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻

<sup>2)</sup> 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻

連絡先：山本直子

鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

Tel/Fax: 099-275-6791

E-mail: naoko-y@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

表1. 年代別分析対象論文 (n=17)

1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
1	1	1	3	0	1	2	0	1	1
2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	
0	3	0	1	1	1	0	0	0	

床前後の母親の対児感情にも違いが見られる可能性も考えられる。研究の目的は、NICU入院中の児の母親の対児感情と言動を明らかにすること、新生児コット移床前後の時期の母親の対児感情と言動の特徴を明らかにすることである。

## II. 研究方法

### 1. 研究デザイン

文献検討

### 2. 検索の手順

2016年7月に、「医学中央雑誌」WEB版を用いて、1998年から2016年までの文献の中から「NICU」「低出生体重児」「未熟児」「早産児」「母親」「感情」「対児感情」のキーワードを組み合わせて検索を行った。新生児コット移床前後の母親の対児感情と言動やその変化が記載されていた文献を抽出した。NICU入院中の児を持つ母親の対児感情に関して看護師が介入した論文は除外した。

### 3. 分析方法

NICUに入院中の児を持つ母親の対児感情を明らかにした後、文献内容を更に抄読し、NICUに入院している期間を新生児用コット移床前と新生児用コット移床後に分け、母親の対児感情と言動の変化を分析した。その際、〈辛い〉<sup>6)</sup>〈懸命に生きている子〉<sup>6)</sup>等、母親の対児感情と言動は、文献の表現をそのまま(カッコ付きのまま)記載した。

## III. 結果

### 1. 分析対象論文の抽出

「NICU」というキーワードに検索条編の原著論文、看護、日本語を入力して、ヒットした文献は1645編、「NICU」and「母親」でヒットした文献は338編、「NICU」and「母親」and「対児感情」でヒットした文献は14編であった。さらに、「早産児」and「母親」でヒットした文献は104編、「未熟児」and「母親」でヒットした文献は131編、「低出生体重児」and「母親」でヒットした文献は199編であった。そのうち、母親の感情・言動とその変化が経時的に記載されていた文献は17編であり、この17編を分析対象とした。

### 2. 研究の動向

表1に17編の分析対象論文を年代別に示す。1998年から2013年の間ではほぼ毎年1編ずつの論文が見られ、2001年及び2009年が3編と最も多かった。2014年以降の文献はみられなかった。

### 3. NICUに入院中の児を持つ母親の対児感情と言動

対象文献を抄読した結果、NICUに入院中の児を持つ母親の対児感情は、質的研究では、児が小さいことに〈かわいそう〉と感じ、児の小ささにショックを受け、〈辛い〉〈怖い〉〈近づきたい〉と感じていることであった<sup>6,7,9)</sup>。また、早く産んでしまったことに対し、多くの母親が〈自責の念〉を感じ、小さく産んでしまって〈申し訳ない〉という感情を抱き、〈子宮に戻してあげたい〉と思う母親もいた<sup>7,8,9)</sup>。その他にも、NICUで医療機器に囲まれており児の活動性が低いことから戸惑いを感じ、〈懸命に生きている子〉〈生かされている遠い存在〉という感情を抱いていた<sup>6,10)</sup>。さらに〈他の子は抱けるのに、自分だけ抱けないのはなんでだろう〉という感情や〈児に触れることや抱っこすることは児にとってはよくないことなのかかもしれない〉という不安な気持ち、子どもの身体の懸念からくる感情を表出していた<sup>6,7,11)</sup>。一方母親は、NICUに入院しているわが子に対して〈愛を感じる〉〈可愛い〉という感情も抱き<sup>12)</sup>、さらに、児に触れる機会が増えることで〈安心する〉〈嬉しい〉という肯定的感情を抱く母親もみられた<sup>6)</sup>。

また、量的研究での、母親の対児感情に関して、接近感情と在胎週数には正の相関がみられており<sup>13)</sup>、出産時の状況において、難産のほうが普通分娩や帝王切開よりも児に対する回避感情が高く表れていた<sup>13)</sup>。

### 4. 母親の対児感情と言動

母親の感情・言動の変化は「母親役割」「出産体験」「児への対児感情と関わり」「母子分離」「NICUの環境や医療処置」の5項目に分類出来た。また、この5項目を新生児コット移床前と新生児コット移床後に分けて分類したものを図1に示す。

#### 1) 母親役割

文献は9編であり、そのうち質的研究は7編であった。新生児用コット移床前には〈母親の実感が増した〉

項目	内容	
	新生児コット移床前	新生児コット移床後
母親役割	<ul style="list-style-type: none"> <li>○母親としての実感が増した</li> <li>○生存を祈る</li> <li>●育児のことを考える余裕がない</li> <li>●未熟な子どもの状態に合わせた育児への戸惑い</li> <li>●世話ができない悲しみ</li> <li>●いてもたってもいられない思い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○普通の子に近づいたという思い</li> <li>○育児への自信</li> <li>○母親としての自信</li> <li>○母親役割が芽生える</li> <li>●不慣れな育児技術の習得に対する不安・恐怖</li> </ul>
出産体験	<ul style="list-style-type: none"> <li>●出産した実感のなさ</li> <li>●児が自分の子という実感のなさ</li> <li>●妊娠・分娩・出産のトラウマスティックな傷つきを感じる</li> <li>●分娩体験でのつまづき</li> <li>●早産への疑問</li> <li>●早産に対してショックを受けている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○早産に対する否定的な思いは激減する</li> </ul>
児への思いと関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>○写真を飾りたい</li> <li>○元気で無事に生まれてきてくれた</li> <li>○とりあえず助かったという思い</li> <li>○子どもを実感する</li> <li>○子どもの生きる力を実感する</li> <li>○児の反応を言葉で表現</li> <li>○慣れた行為は積極的に行う</li> <li>○児の動きに意味づけ</li> <li>●何もしてやれない</li> <li>●虚しさや悲しさ・歯がゆい</li> <li>●怖くて触れない・見ることはできるが触れない・見られない</li> <li>●大きくなるのかという成長への不安</li> <li>●原因を探す・予後への心配</li> <li>●児への謝罪の気持ち</li> <li>●子どもが早く生まれてしまったことや小さく生まれたことにストレスを感じる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ほっとした気持ち</li> <li>●成長・発達の遅れへの心配</li> <li>●後遺症の可能性の心配</li> </ul>
母子分離	<ul style="list-style-type: none"> <li>○母子分離の状態を客観的に捉え治療のためならと受け入れる</li> <li>○子どものそばにずっといることができない</li> <li>●子どもを抱くことができないことにストレスを感じる</li> <li>●母子分離のつらさ</li> <li>●自分が母親だという実感が無い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○退院をイメージし始める</li> <li>○声掛けを行い、語りかけるようになる</li> </ul>
NICUの環境や医療処置	<ul style="list-style-type: none"> <li>○児の体重増加や医療処置の減少によって成長・発達を実感</li> <li>●子どもにたくさんの機器や点滴がついていたことにストレスを感じる</li> <li>●突然モニターのアラーム音が鳴ったことにストレスを感じる</li> <li>●他の母親に話しかけてはいけない雰囲気</li> <li>●自分には手が出せないところにおいて近づくことができない</li> <li>●自分の子どものことを他の母親に知られることに対する戸惑い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○生命を保障されたことによる安堵</li> <li>○順調に経過していることに安堵する</li> <li>○NICUに入院することを受容する</li> </ul>

図1. 母親の対児感情と言動の経時的変化

※○は肯定的感情や言動と考えられるもの、●は否定的感情や言動と考えられるもの。

という感情を抱き<sup>5)</sup>、さらに、ちょっとでも大きくなってほしいという〈生存への祈り〉をするという肯定的な感情を持っていた<sup>13)</sup>。

一方、否定的感情も同時に持ち、急な妊娠分娩の経過によって〈育児のことを考える余裕がない〉という感情を抱きながらも<sup>5)</sup>、〈世話ができない悲しみ〉や〈いてもたってもいられない〉という感情を母親は抱いていた<sup>13)</sup>。また、〈未熟な子どもの状態に合わせた育児への戸惑い〉を感じている母親もいた<sup>12)</sup>。新生児用コット移床後は、児の状態が安定し、児の世話が楽しめるようになり〈普通の子に近づいたという対児感情〉が抽出されていた<sup>4)</sup>。

また、育児に参加することで〈育児への自信〉〈母親としての自信・役割〉〈母親役割が芽生える〉と述べら

れていた<sup>6,14)</sup>。一方で、不慣れな育児技術の習得により〈恐れ〉や〈不安〉の感情が再び生じるようになっていた<sup>7)</sup>。また、量的研究では、初産婦の母親よりも経産婦のほうが育児肯定得点が有意に高かった<sup>11)</sup>。その反面、児の出生体重、母親の年齢と対児感情・母性意識の関連性はみられなかった<sup>11)</sup>。さらに、子どもの統制不能感(自分の手には負えない・対処方法が分からないという感情)のある母親は12%を超え、予期不安感のある母親は80.6%であった<sup>15)</sup>。

## 2) 出産体験

文献は3編で、全て質的研究であり、その中で新生児用コット移床前の肯定的感情はみられなかった。一方〈妊娠・分娩・出産のトラウマスティックな傷つき〉<sup>5)</sup>〈分

娩体験のつまづき<sup>9)</sup>〈早産に対してのショックを受けている<sup>6)</sup>〉という共通した否定的感情を抱いていた。その他にも心理的距離から〈出産や児が自分の子という実感のなさ<sup>5)</sup>〉を感じ、〈早産への疑問〉を感じている母親もいた<sup>6)</sup>。しかし、新生児用コット移床後は〈早産に対する否定的な対児感情は激減する〉であった<sup>6)</sup>。

### 3) 児への対児感情と関わり

文献は9編で、全て質的研究であった。新生児用コット移床前には〈元気で無事に生まれてきてくれた〉〈とりあえず助かった〉という感情を抱き<sup>16)</sup>、また子どもに会う・触れることで〈子どもを実感〉し、〈子どもの生きる力を実感する〉という感情を母親は抱いていた<sup>16)</sup>。さらに育児において〈慣れた行為は積極的に〉行い、〈児の反応を言葉で表現〉し、〈児の動きに意味づけ〉を行う母親がみられた<sup>7)</sup>。母親の中には〈写真を飾りたい〉という対児感情もあった<sup>4)</sup>。同時に新生児用コット移床前には、否定的感情を母親は抱いており、その中で現在の状態に対して、〈何もしやれない〉〈虚しさや悲しさ〉〈歯がゆい<sup>5)</sup>〉〈児への謝罪の気持ち<sup>6)</sup>〉という対児感情を抱いていた。また、前述の肯定的感情と反対に〈怖くて触れない〉〈見ることはできるが触れない〉〈見られない〉という感情を抱き、児への関わりが受け身的な母親もみられた<sup>7)</sup>。また、9編の文献のうち、2編の文献で共通していたことは、〈大きくなるのかという成長への不安〉〈予後への心配〉という将来を不安に思う点であった<sup>5,13)</sup>。さらに新生児用コット移床前に母親は〈子どもが早く生まれてしまったこと〉〈子どもが小さかったということ〉に対してストレスを感じていた<sup>17)</sup>。しかし新生児用コット移床後には〈ほっとした気持ち〉を抱き<sup>18)</sup>、悲嘆や後悔の気持ちを持つ母親も徐々に前向きな表現に変化していた<sup>10)</sup>。一方新生児用コット移床後も〈成長・発達の遅れへの心配〉〈後遺症の可能性の心配〉という将来への心配は継続して持っていた<sup>18)</sup>。

### 4) 母子分離

文献は5編であり、全て質的研究であった。新生児用コット移床前の肯定的感情として〈母子分離の状態を客観的に捉え治療のためなら受け入れられる<sup>19)</sup>〉としている一方で、〈子どものそばにすることができない〉〈子どもを抱くことができない<sup>17)</sup>〉ということにストレスを感じ、〈母子分離の辛さ<sup>6)</sup>〉を感じている母親もいた。その他にも〈自分が母親だという実感が無い〉とする母親もみられた<sup>5)</sup>。一方新生児用コット移床後は、子どもに〈声掛けを行い語りかけるようになる〉といった様子が見られ<sup>7)</sup>、〈退院をイメージし始める<sup>6)</sup>〉という感情がみられた。

### 5) NICUの環境や医療処置

文献は4編であり、全て質的研究であった。新生児用コット移床前には児の体重増加や医療処置の減少によって〈成長・発達の実感と喜び〉を感じていた<sup>18)</sup>一方で、〈子どもにたくさんの機器や点滴が付いていたこと〉〈突然モニターのアラーム音が鳴ったこと〉に対し母親はストレスを感じていた<sup>17)</sup>。加えて〈自分には手が出せないところにいると近づくとできない〉と感じ、〈他の母親に話しかけてはいけない雰囲気〉や、〈自分の子どものことを他の母親に知られることに対する戸惑い〉をもち孤独を感じていた<sup>8)</sup>。新生児用コット移床後は安堵の気持ちが生じ、〈生命を保障されたことによる安堵〉〈順調に経過していることに安堵する〉〈NICUに入院することを受容する〉という感情を抱いていた<sup>9)</sup>。

また、母親は、〈様々なストレスに対して、〈面会の時必ず看護婦に話を聞く〉〈面会の時に子どもの世話をする〉、兄弟がいる場合には〈子どもの兄弟と話をする〉といった面会時に児との関わりを持ち、医療者に児の状態を聞くといった対処行動を取っていた<sup>17)</sup>。またその他にも量的研究で対児感情の接近得点と母性意識の育児肯定得点には正の相関がみられ、対児感情の接近得点と母性意識の育児否定得点・葛藤得点には負の相関、対児感情の回避得点と母性意識の育児肯定得点には負の相関がみられた<sup>11)</sup>。さらに不安について、特性不安得点・状態不安得点両者において、正常分娩とNICUに入院した児の母親を比較すると、統計学的有意差を認め、後者が高いレベルにあることが示された。しかし、対児感情得点と母性意識に関しては正常分娩とNICUに入院した児の母親の間では統計学的有意差は認められなかった<sup>20)</sup>。

## IV. 考察

### 1. NICUに入院中の児を持つ母親の対児感情

児への否定的感情を多くの母親が感じていたが、一方で普通に出産した母親と同じように〈可愛い〉という肯定的感情を持つ母親がいた。これは、生まれてから児に対する感情が湧き起こるのではなく、妊娠中の母子の相互作用が影響しているのではないかと考える。親役割獲得過程の中で、胎児との愛着形成は絆形成と表現され、胎児に話しかけたり、胎動に反応して触れることで胎児との相互作用を深め、絆を深めていく。胎児の動きの特徴から胎児の個性を想像したり、出産後のわが子を想像し、それによってさらに愛着が形成されていく<sup>21)</sup>。このことから、否定的感情だけでなく、わが子を愛おしいと感じる肯定的感情が表出されたのではないかと考える。ゆえに、看護師としてどちらの感情も母親が表出できるように話を傾聴し、感情を受け止めることが必要ではないかと考える。また関島らによると、母親の対児感

情と出産経験の関連について、接近得点は初産婦と経産婦に差はみられないが、初産婦の方が育児経験の不足や知識の不足から回避感情が高かった<sup>22)</sup>。加えて、育児や育児に対しての不安や心配事に関して初産婦では90.1%、経産婦では64.2%の母親が感じており、その中で初産婦は、「泣いている意味が分からない」「何かの病気になるか心配」ということを経産婦より不安に感じていた<sup>22)</sup>。また、対児感情の低い母親の特徴として、初産婦で、仕事があり、混合栄養であった<sup>23)</sup>。これらのことから、初産婦でNICUに入るという経験をする母親は特に否定的な感情を強く持つようになるのではないかと考える。よって、初産婦や不安、否定的な感情を強く持つ母親に対して、不安の内容や心配事を聞き、必要に応じて情報提供を行うといったケアが必要ではないかと考える。一方、吉田ら<sup>24)</sup>によると、2人目を子育てしている母親の方が、孤立感や疲労感から育児不安が高くなっていた。育児の対象数が増え、経産婦であっても、初産婦とは異なる育児不安や疲労感が生じると考えるので、疲労感や精神面へのケアが必要であると考え。さらに、夫や家族の協力も必要であると考え、家族への支援も必要ではないかと考える。

本研究で〈怖くて触れない〉〈見ることはできるが触れない〉という対児感情があることが分かった<sup>7)</sup>。タッチケアは母子相互作用を促すケアの1つである<sup>25)</sup>。また、子どもを抱くことは親子の触れ合いとして重要である<sup>26)</sup>。医療機器がついた状態でのタッチや子どもを抱くことは、母親にとって容易なことではないかも知れない。看護師の手を煩わせたり、自分の欲であると考え、母親がいるかもしれない。看護師はこのような母親の気持ちも考慮しながらケアを促す必要がある。タッチケアや抱っこを勧める前には、十分に方法や効果を説明すること、母親の心理状態や早産の受け止め状況をアセスメントし、適宜声掛けを行う必要があると考える。

また、難産のほうが普通分娩や帝王切開よりも児に対しての回避感情が高く表れていた。伊藤ら<sup>27)</sup>は出産体験と対児感情について出産体験を肯定体験として捉えている者は、否定体験（混乱・痛み・苦痛）として捉えている者に比べて接近得点が高く、回避感情が低かったと述べている。難産という体験は否定体験として母親は捉え、そのことが対児感情における回避得点が高いという結果になったのではないかと考える。NICUに入院する児の母親の中にも、難産を経験した母親がいる可能性がある。よって出産を肯定的体験としてとらえられるようにする支援することが必要であると考え。

## 2. 新生児コット移床前後の母親の対児感情と言動の変化

「母親役割」について新生児用コット移床前には否定的感情が多く抽出されていたが、新生児用コット移床後には、母親としての自信・役割が芽生え肯定的感情が見られるようになっていた。また、育児への自信も出てきている一方で不慣れた育児技術の習得に対しての不安と恐怖の感情があった。これは、低出生体重児であると、体が小さかったり、医療機器を装着しているため、抱くこと一つにしても成熟児と比較すると児の世が大変だと感じるからではないかと考える。また、経産婦であっても年月が経っていると児の世話をする段取りを忘れてしまっていたり、NICUという特別な環境での育児を経験が初めてであるという母親もいると考える。

新生児用コット移床後により育児のことを考える余裕ができ、母親としての自信・役割が芽生えても、不安が大きくなってしまうと退院後の育児にも影響が出てしまうと考え。ゆえに、現在できている育児技術を認め、経産婦であっても1つ1つ確認をしながら、育児指導をしていくことが必要であると考え。さらに家族のサポートも必要であると考え、夫や家族のサポート体制を確認し、必要な時には家族の支援も必要であると考え。

「出産体験」について、新生児用コット移床前には肯定的感情はなく、否定的感情・言動が多くみられた。しかし、新生児用コットに移床することで否定的な対児感情は激減していた。新生児用コット移床前に否定的感情が多く見られたのは、思い描いていた妊娠・出産と違うことや、急な分娩となってしまったからではないかと考える。さらに出産体験についても振り返ることなく児の状態や児の世話といった児のことを考えなければならぬからではないかと考える。森島らは早期産で低出生体重児を出産した母親は出産体験を否定的に捉える傾向があるとしている<sup>28)</sup>。よって母親の出産体験について傾聴し、面会時には育児指導だけでなく、感情表出の機会をつくる必要があると考える。

「児への対児感情と関わり」について、子どもの側にいることができないことにストレスを感じ、出生後すぐにNICUに入院しているため自分が母親だという実感がないという感情を表出していた。これについて、面会時には会えないときの子どもの良い変化を伝えるということ、子どもに触れたり、世話をしてもらおうといった支援が必要であると考え。

また、新生児用コット移床後にも「大きくなるのか」という成長への不安、後遺症の可能性の不安は継続しているということが分かった。成熟児の母親であっても「何かの病気になるか心配」という不安を表出して

おり<sup>22)</sup>、特にNICUに入院する新生児を持つ母親は子どもの成長への不安が大きいのではないかと考える。よって、母親の話の聞き、不安内容を明らかにし、具体的な指導や情報提供を行う支援が必要であると考えられる。

「NICUの環境と医療処置」について、モニターのアラーム音が気になったり<sup>17)</sup>、ほかの母親に話しかけてはいけない雰囲気がある<sup>9)</sup>という否定的感情があるということが分かった。

一方、新生児用コット移床後には、順調に経過していることに安堵し、NICUに入院することを受容するようになることが分かった<sup>10)</sup>。NICUに重症な子どもの入院があると、スタッフの動きが激しくなったり、モニターのアラーム音、スタッフの声も大きくなりがちである<sup>29)</sup>。医療スタッフの言動やNICUの環境改善は、母子分離を余儀なくされ、自責の念や児への不安を抱く母親にとって安心感や、信頼関係を築く上で重要であると考えられる。ウィーデンバックとフォールズ<sup>30)</sup>によると、患者と看護師間の信頼関係を、「お互いに密接な間柄にあり、しかも、相手の正直さ・誠実さ・信頼感および責任感について、固い信念を持っている2人の人物の間に存在する結びつきのことである」

加えて、「これは、効果的な看護が打ち立てられる基盤となるものであり、それを確立し続ける責任は、ひとえに看護師にある」と述べていた。ゆえに、面会時には医療者側から声をかけ、コミュニケーションを通して、相互に信頼できる関係性を築き、母親を支援していくことが必要であると考えられる。

看護師は母親を支援する際、新生児コット移床前後で否定的感情に変化があり、特に新生児コット移床後より移床前の方が否定的感情が多いことを理解した上で、信頼関係を構築すること、不安の傾聴や感情表出の機会を作ること、個別な支援を行う重要であると考えられる。

## V. 結論

1. NICUに入院中の児を持つ母親の対児感情は、〈怖い〉〈自責の念〉などの否定的感情が表出された。一方で、〈可愛い〉〈愛を感じる〉などの肯定的感情が見られた。
2. 母親の対児感情と言動を分析した結果、「母親役割」、「出産体験」、「児への対児感情と関わり」、「母子分離」、「NICUの環境や医療処置」の5項目に分類出来た。
3. 新生児コット移床前後で比較すると、新生児コット移床後の方が母親の否定的感情と言動が減少していた。
4. NICUに入院中の児を持つ母親を支援するためには、新生児コット前後の母親の対児感情や行動の特徴を理解した上で、信頼関係を構築すること、不安の傾聴や

感情表出の機会を作ること、個別な支援を行う重要であることが示唆された。

本論文内容に関連する利益相反事項はない。

(本研究の一部は第20回日本乳幼児精神保健学会全国学術集会において発表した。)

(本研究は鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻卒業研究を一部加筆修正した。)

## 文献

- 1) 厚生労働省：平成29年（2017）人口動態統計の年次推計，<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikei17/dl/2017suikei.pdf>（2018年11月20日アクセス）
- 2) 厚生労働省：平成30年我が国の人口動態，<https://www.mhlw.go.jp/english/database/db-hw/dl/81-1a2en.pdf>，（2018年10月31日アクセス）
- 3) 厚生労働省：平成29年人口動態統計月報年計（概数）の概況，<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai17/dl/h1.pdf>（2018年11月20日アクセス）
- 4) 奈良間美保，丸光恵，堀妙子 他：小児看護学概論 小児臨床看護総論. 第13版，医学書院，東京，2017，p12
- 5) 西海真理：早産児を出産した母親が児との関係を育むということ. 日本新生児看護学会誌. 2001；8：23-35.
- 6) 飯塚有紀：NICUへの入院を経験した低出生体重児の母親にとっての母子分離と母子再統合という体験. 発達心理学研究. 2013；24：263-272.
- 7) 近藤祐子，大宮加代子，川端留美，他：低出生体重児を出産した母親の心理状態の変化—児のNICU入院から退院に至るまで—. 日本看護学会論文集小児看護. 2003；34：115-117.
- 8) 藤本栄子，城島哲子，宮谷恵，他：極低出生体重児の母子関係と看護援助. 日本新生児看護学会誌. 1999；6：16-24.
- 9) 西田志穂：NICUから小児病棟に転棟し継続入院する乳児を持つ母親の体験. 日本看護科学会誌. 2006；26：64-73.
- 10) 山本正子：M-GTAを用いたNICU入院初期の児をもつ母親の子どもの受容プロセスの研究. 母性衛生. 2009；49：540-548.
- 11) 原田真由美：極低出生体重児の母親の愛着形成過程とその関連要因. 日本新生児看護学会誌. 2001；8：20-31.
- 12) 山本美佐子，水島禮子，堀込和代，他：NICUに入院した子どもの母親の対児感情と母性意識の変化と特徴—入院時から退院後1年間における変化と満期

- 産児の母親との変化一. 北海道医療大学看護福祉学部会誌. 2007; 3: 7-14.
- 13) 木戸久美子, 内山和美: NICU を退院した児を抱える母親の対児感情に関する実証的研究. 母性衛生. 1998; 39: 114-119.
- 14) 小池伝一: NICU 入院期間中の超低出生体重児の両親の家族形成過程. 日本新生児看護学会誌. 2009; 15: 20-27.
- 15) 北村亜希子: 低出生体重児の母親の期待感・予期不安感と子ども統制不能感に影響する因子の検討—子どもがNICU 入院中と退院後の比較—. 日本新生児看護学会誌. 2011; 17: 2-10.
- 16) 池内和代, 内藤直子: 超低出生体重児をもつ母親のナラティブ(語り)と母親に対するケア. 香川大学看護学雑誌. 2009; 13: 43-54.
- 17) 堀妙子: NICU に入院している低出生体重児の母親のストレスとその対処について. 日本新生児看護学会誌. 2000; 7: 33-41.
- 18) 近藤祐子, 角井直美, 大宮加代子, 他: 低出生体重児の母親の対児感情の変化やタイプ—NICU 退院までの状態や成長発達への対児感情に焦点をあてて—. 日本看護学会論文集小児看護. 2004; 35: 59-61.
- 19) 木戸裕子, 横尾京子, 福原里恵, 他: NICU に入院した子どもの退院を決心するまでの母親の経験—入院が長期化しやすい疾患をもつ子どもの母親に焦点をあてて—. 日本新生児看護学会誌. 2012; 18: 10-18.
- 20) 下田あい子, 戸部和代, 今関節子, 他: NICU に入院した児の母親と正常分娩をした母親の不安・愛着の比較. 日本新生児看護学会誌. 2001; 8: 45-52.
- 21) 森恵美, 高橋真理, 工藤美子, 他. 系統看護学講座専門分野Ⅱ 母性看護学2. 母性看護学各論, 第12版. 医学書院, 東京, 2014, p69.
- 22) 関島英子, 齋藤益子, 木村好秀, 他: 1 ヶ月の乳児をもつ母親の健康感と対児感情に関する検討. 母性衛生. 2006; 47: 62-70.
- 23) 武田江里子: 対児感情の低い母親の妊娠期から産褥期における傾向と特徴. 小児保健研究. 2007; 66: 665-674.
- 24) 吉田弘道, 山中龍宏, 巷野悟郎, 他: 2 人目の子どもを育てている母親は育児不安が軽いか. チャイルドヘルス. 2001; 4: 60-63.
- 25) 渡辺香織: タッチケアが産後1~2 ヶ月の母親の愛着・育児不安・母子相互作用に及ぼす影響. 母性衛生. 2013; 1: 61-68.
- 26) 本田直子, 杉本陽子, 村端真由美: 早産児をもつ母親がわが子を抱いている時の対児感情と抱くことの意味. 日本小児看護学会誌. 2015; 24: 44-50.
- 27) 伊藤和子, 清野喜久美, 関島英子, 他: 初産婦の出産体験とその関連要因—産褥早期を中心に—. 母性衛生. 1996; 37: 194-199.
- 28) 森島知子, 國清恭子, 堀込和代, 他: 早期産で低出生体重児を出産した母親の出産体験に関する検証研究. 北関東医学会. 2011; 61: 15-23.
- 29) 竹村晃子, 井汲美恵, 大内あや子: NICU における母親の満足調査. 長野赤十字病院医誌. 2004; 18: 153-156.
- 30) アーネステイン・ウィーデンバック, キャロライン・E・フォールズ著, 池田明子訳. 新装版コミュニケーション—効果的な看護を展開する鍵—, 新装版, 第1刷. 日本看護協会出版, 東京, 2007, p130-133.

# **Mothers' feelings and behaviors toward their infants in the NICU: A literature review: focusing on infants' condition as they are shifted from an incubator to a cot for newborns**

Eri Kugisaki<sup>1)</sup>, Naoko Yamamoto<sup>2)</sup>

1) Former Kagoshima University Faculty of Medicine School of Health Sciences Department of Nursing

2) Kagoshima University Faculty of Medicine School of Health Sciences Department of Nursing

Address correspondence to :Naoko Yamamoto

8-35-1, Kagoshima City, 890-854, Japan

TEL/FAX:099-275-6791

E-mail: naoko-y@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

## **Abstract**

This literature review aims to clarify mothers' feelings and behaviors toward their infants in the NICU and, the characteristic feelings and behaviors of mothers when the infants are shifted from the incubator to a cot for newborns.

A total of 17 papers on mothers whose infants were admitted in the NICU to receive intensive support from medical professionals were analyzed.

The present study shows that mothers experience negative feelings such as "fear", and "remorse", and positive feelings such as considering the infant "adorable", and "treasure".

On analysis, mothers' feelings toward infants in the NICU and the changes in their feelings over time were divided into five classes: "role of a mother," "childbirth experience," "mother's thoughts and behaviors toward the infant," "mother-infant separation" and "environment in the NICU and medical care received." Over time and with the shifting of infants from the incubator to a cot for newborns, mothers' negative feelings and behaviors decreased.

The results indicate that nurses must understand the characteristic feelings and behaviors of mothers toward their infants when they are shifted from the incubator to a cot for newborns.

The results also suggest the importance of building reliability in mothers, providing opportunities for mothers to discuss their anxieties and explore their feelings, and offering individualized care to mothers in the NICU.

**Key words:** feelings toward infants, NICU, mother, a cot for newborns